

野菜栽培コースにおける研修の改善～海外と国内をつなぐ国際耕種の取り組み <その6>

最終回：おわりに

筑波国際センターにおける野菜栽培技術研修コースの歴史は古いですが、国際耕種としては国別特設コース等も含めて10数年以上にわたって携わってきている。その中でも特に近年は、小規模農家、生計向上、さらにはマーケティング等も重視されており、また農家への技術・情報伝達を効果的に行うために、研修員の普及能力向上も重要なテーマとなっている。これは、国際協力の現場においても普及・研修やマーケティングが重視されていることとも関連している。

そうした中で本シリーズで紹介したように、海外と国内をつなぐ国際耕種の取り組みの一つとして、「途上国での経験を研修業務に生かし、研修での経験を途上国での業務に生かす」という観点からの我々の研修活動への取り組みを紹介した。ここでは4回にわたって紹介した事例を横断的に振り返って、いくつかの観点からその特徴を述べてみる。

普及能力強化

野菜栽培技術研修コースの研修員たちは何らかの形で普及活動に関わっていることが多く、研修内容が帰国後の普及活動に役立つという観点が重要である。そのために、研修員自身の考える力や判断できる力を向上させることを、一連の研修を通しての目標としている。特に、普及プロジェクト等の具体的な事例の紹介や、普及活動の実施支援のためのマニュアル作成やデータの活用法等があげられる。また、研修員自身が自分でできるようになるために、次項のように実践的な研修とするためのさまざまな工夫を行っている。

実践的な研修という観点

研修実施においては自分の手を動かして実践することを重視している。例えば、農業統計データの解析や作物要水量の計算を研修員各自に課したり、自分の意見や考えをそれぞれカードに書き込んで、それをもとにグループ討議を行う等の演習を行っている。また、野外における灌漑実習では土壌サンプルを触って土性の差を実感したり、灌漑水路の流量測定も行う。さらに、五感を用いた情報収集法の紹介や体験等もユニークな一面である。

研修員の帰国後の活動について

研修員は研修終了後、帰国後それぞれの業務に戻ることになる。その際、研修終了時に作成したアクション・プランを実施することになるが、実施に当たってはさまざまな困難に直面することがある。例えば、日本とは状況が異なったり、資金、資材、人材などが充分なかったり、アクション・プラン実施について上司の理解が得られない等が考えられる。

このような問題に対処してアクションプランを実施していくためには、技術プラス問題解決能力が求められることになる。こうした能力は経験を通して学んでいったり身に付けていくことになるが、経験だけではなくスキルアップのための研修等の機会も必要ではないかと思われる。

本シリーズで取り上げた講義・実習について、その概要や到達目標、研修員の帰国後の活動との関連に着目して下表にまとめた。

講義・実習項目	講義・実習の概要	研修の到達目標や研修員の帰国後の活動との関連
有用技術の現地適用と普及	普及員として求められる能力を CUDBAS を通して確認・共有。五感や身体を活用した情報収集法。普及のためのマニュアル作成法等。	<ul style="list-style-type: none"> 研修員自身の考える力や判断できる力の向上をめざす。 現地の状況に即した農民指導法やマニュアル作成法等への理解を深め、現地での普及活動に活用する。
作物生産と灌漑	作物生産性向上に欠かせない灌漑技術の講義・実習。灌漑スケジュールや作物要水量、灌漑水路流量の推定等の演習も行う。	<ul style="list-style-type: none"> 灌漑に必要な作物に必要な水の量とタイミングの基本的な考え方を理解する。 灌漑についての基礎的理解を今後の普及活動に活かす。
普及のためのデータ収集・活用法	普及のための基本的データ活用法や、データ収集のための農家調査法、調査票の作成法等に関する講義・実習。普及技プロの事例紹介。	<ul style="list-style-type: none"> 既存データや収集データの解析から地域の特性を把握。 農家調査法や普及活動の実施具体例を学び、現地におけるより効果的な普及活動の実施につなげる。
マーケティング手法	マーケティングに関する技プロ活動事例の概要を紹介し、4Pのマーケティング・ツールの観点からグループ単位で分類・解析する講義・演習。	<ul style="list-style-type: none"> 分類結果を研修員自らの経験・知見に基づき分析を進め、技プロ活動に対して提言し、実践力・応用力を培う。 マーケティングの感覚について、少しでも実践的センスを身につけて今後の活動に活かす。